Brigham Young University
BYU ScholarsArchive

Spiritual Proficiency ANEL

Winter 12-13-2023

伝道スピリットが増して

Yoshihiko Ariizumi
yoshi.ariizumi@gmail.com

Follow this and additional works at: https://scholarsarchive.byu.edu/sproficiency

Part of the Education Commons

Recommended Citation

Ariizumi, Yoshihiko, "伝道スピリットが増して" (2023). *Spiritual Proficiency*. 26.
https://scholarsarchive.byu.edu/sproficiency/26

This Article is brought to you for free and open access by the ANEL at BYU ScholarsArchive. It has been accepted for inclusion in Spiritual Proficiency by an authorized administrator of BYU ScholarsArchive. For more information, please contact ellen_amatangelo@byu.edu.

祈りと実践の結果

有泉芳彦
yoshi.ariizumi@gmail.com
２０２３年１２月

出典：https://parstoday.ir/ja/radio/programs-i33862

はじめに

前の記事（福音を分かち合う1.1[1)]）で書いたように、伝道の業、神様の大事な業にもっと真剣に取り組むという決意のもと、決まった祈りを毎日行い、日々自分を奉献して生活してみました。特にフルタイムの宣教師のように、朝から晩までこの業に専念できたわけではありません。自分が日常やらなければならないことをやりながら、プラスアルファの部分で、伝道にかかわると思われることをやったという程度のことです。ですから、この経験は、一般の教会員にある程度当てはまると考えられます。では、このプロジェクトを始めてから起こった主な出来事を証として述べたいと思います。この記事に何らかのヒントを得ていただき、何か伝道活動を始めてみて、証を得た方は、是非、上のメールアドレスにその証や経験について送ってくださいね。わたしは読者の皆さんが試してみて、みたまによって特別なことを学ばれることを固く信じているので、自分がもっと上のレベルに上っていかれるように、皆さんからのフィードバックを待っています。

毎日欠かさず、次のような祈りを始めて、１か月ほどになりました。経験や考えたことの記録も１０ページをだいぶ超えていました（このレポートを書くことがユーピメソッドのカギになるので絶対おすすめです）。実は、このようにレポートを書くプロセスで一番学んでいるのは自分であることを知っています。ですから、もともと１月にこのレポートを書くつもりでしたが、前倒しで、今書いています。日々の祈りの中に入れたのは、前の記事に書いたように、

１）今日１日を神様の御手に使われて、福音を伝える機会につながるような出会いがあるように、自分を奉献します。
２）わたしが１日の活動の中で、導かれてだれか神様が備えてくださっている人に巡り合えますように。あるいは、その人がわたしのところに導かれてきますように。
３）その出会いがあったときに、その人がわたしの会うべき人だと認められるように。
４）その人に対して、みたまとともに考え、語ることができ、ふさわしく行動できますように。
５）「神様とのパートナーシップ」を使って、その後の接し方について導きを受け、１つ１つを御心のままに行動に移すことができるように。

だんだんわかってきたのは、このように真剣に祈っているので、実は、その日に起こるすべての出会いは、神様の計らいがあってのことだと、了解するようになり、上記の項目３は、「この人がその人なんだ」と決めることではなく、「この人に対して、**今**、自分は何をすることが求められているのだろう」というように考え、導かれるように祈ることにしました。また、項目４について、考えるだけでなく、ふさわしく「感じられる」ようにという言葉を付け加えました。その結果は、エピソード２でも感じられました。

このプロジェクトのおかげで、この１か月余は、とても充実していて、深い喜びが数多くありました。その喜びの源は、救い主がわたしと共におられ、導かれているという実感であったと思います。

前の七十人であり、BYUアイダホで学長も務められたKim Clark長老の、彼にとっての最後の総大会でのお話は、次のような文章で印象的に締めくくられています。

When we talk, He talks.

つまり、わたしたちの信仰生活で最もカギとなる態度は、絶えず意識を救い主に向けることでしょうが、クラーク長老が言われたように、わたしたちが考え、感じ、行動に示すときに、それが救い主がそこにおられたら考え、感じ、行動されることと重なってくるとき、深い喜びが満ちてきます。常にそう感じられるほどわたしのレベルは至っていませんが、この１か月余りの間、何度もそれに近い経験が起こって、驚きました。これが、伝道に情熱を注いで得られる最高の報いだと思います。

では、具体的なエピソードに入っていく前に、学んだ３つの大切なポイントについてまとめます。
１）「伝道のモード」という表現で、伝道活動を広くとらえると、達成感が得やすい。
２）伝道モードで人と接するとき一番大切なポイントは、「意識をズームアウト」すること。
３）出会いの後すぐに「報告」すべきこと。

１）「伝道のモード」という表現で、伝道活動を広くとらえると、達成感が得やすい

伝道というと、敷居が高いと感じる人が多いことを何度か書きました。福音について直接的に話し、証し、バプテスマまで導くというレベルでやることだけが伝道だというイメージを持っていると、なかなかそんな機会は巡ってきませんよね。それでなんとなく日々を過ごしていると結局何もしないまま、あっという間に年月が流れてしまいます。このプロジェクトをしながら、考えては書き、書いては考えている中で、ある時ふと、「伝道のモード」ということばが思いつきました。「これだ！」と思いました。こんなことにも神様の導きがあるのですね。この概念は次のようなことをしている状態を表す言葉です
１）相手に笑みを浮かべながら近づく
２）挨拶をする
３）相手について知るように努める（本人から直接でも、ほかの人からでも）
４）相手のニーズを察して、そのことについて自分が何かできるか尋ねたり、考える
５）相手に対するコンタクトが始まる前に（毎たび）その人のことを心の中で祝福する
６）相手を何かの活動などに招待する。あるいはその人から招待されたことに参加する
７）その他、みたまが促していることを、考え、感じ、行動に移す

どうでしょうか。以上のことなら、だれに対してでも、できそうだと感じませんか。さらに、伝道は非教会員に対してだけのものではないと考えられます。教会員である家族に対しても、あるいは教会員全般に対しても、伝道モードで接することができるでしょうし、そのようにしてわたしたちが行うとき、結果としては救い主のもとへ人々を導くこととつながってくるので、まさしくそのように、一見些細と思われる行為であっても、伝道の業の一部だといえるでしょう。

安息日などに一週間のことを準備するときに、あるいは、前夜またはその日の朝に、一日のことを計画するときに、自分はいつどのように伝道モードで活動するかを決めておくと、意識をはっきりさせることができ、意味のある伝道活動になる確率が一挙に上がるでしょう。

２）伝道モードで人と接するとき一番大切なポイントは、「意識をズームアウト」すること

わたしは、この期間に何十人もの人たちにコンタクトする中で、気づいたことは、ともすると、自分とその人が差し迫ってなすべきことのために、機械的にそのことを進めていて、伝道モードの特別な意識が起こってこないことです。つまり、自分の心の目のレンズが、今やるべきこと、やらなければならないことにフォーカスしすぎて、伝道モードが入ってくるスキがなくなってしまうことです。

出典：https://aijapanlab.com/midjourney-ai/2884/

ですから、意識して、その瞬間に、ズームアウトして、やろうとしていることだけでなく、この出会いにはもっと大事なことがあるんだと自分の心に言い聞かせる必要があります。これは楽ではありませんね。わたしたちって、どうしても今やっていることに夢中になって気持ちをそらすことができなくなってしまいますよね。ですから、「ズームアウトする」というテクニックが身につくように、自分を訓練する必要があります。

ある時、夢だったのか、ただ頭の中で考えていたのか、忘れてしまいましたが、「わたしが出会う人々って、前世では、一緒に何かをやっていた仲間だったんだよな」と考えるようになりました。そういう思いで、コンタクトする人たちを見ると、全然意識が違ってくるんですね。一挙に親しみの気持ちが出てきます。そうです。わたしたちがズームアウトしてイメージしたいのは、このように前世の時のことに思いをはせ、自分がこの人と深くつながっていると意識することなんです。そうすると、その人に対する親しみは１００倍ぐらいになるかもしれません。

３）出会いの後すぐに「報告」すべきこと

わたしは特にそうですが、人間って、自分の思ったようにやっていると、けっこうな頻度で、正しい道から逸れて行きます。目隠しのゲームみたいにやってみればわかりますよね。真っすぐだと思っていても、わたしたちの歩んでいく道はついつい真っすぐな道から逸れてしまいます。伝道の御業についても同じことが言えます。わたしもこの経験の中で、自分では判断が難しいと感じたり、バイアスのある目で判断しそうになったこともありました。伝道の業に成功する一番のカギになることは、この「報告」です。神殿の儀式で、エンダウメントを受けた人にはピンとくるかもしれません。救い主であっても、１つづつのステップごとに、報告して天父から指示を仰いでいるではありませんか。

ある近所の方で、女性の方なのですが、数分間くらいの会話の中で、３回も、「うちに遊びに来てください」と誘われたのです。初対面でです。うちの家内にも相談しましたが、その会話があった直後に天父に報告しました。すると、自分はともすると義理堅く、行かなければならないかなあと思う方なのですが、祈りの結果導かれたのは、「行かなくていい」という勧告で、気持ちが晴れました。時には、ちょっとした判断の違いで、不必要にいろいろ難しい状況に巻き込まれてしまうかもしれません。ですから、細かいことにも報告することが大切です。安全で自分に無理のない道を進むためです。逆に、この人にはコンタクトしても何にもならないだろうというように感じる時でも、「アプローチしなさい」という促しもやってきます。やってみると、何回かのコンタクトを重ねるにつれて、その方が神と人にも愛されるような素晴らしい方であることがわかってきました。これも、第一印象が自分を欺いたケースで、勉強になりました。報告することを繰り返すうちにわかってきたことは、神様の方法に頼れば頼るほど、自分の前にスムーズで意味のある道が開けてくるということです。

では、３つのエピソードを紹介してみたいと思います。最初の２つの内容はとても短く、３番目は、４０分ぐらいの比較的短い間に起こったことですが、びっくりするほど内容の濃いものでした。若干説明が加わるので、長くなってしまいますが、お読みください。また、同様の経験を読者の方も数々なさるでしょうから、わたしにどんなに些細なことでもいいですので、教えていただけるとありがたいです。

エピソード１

これは、「わたしたちのありようや、行いがことばよりもっと雄弁に語る」と理解した例です。一連の出来事があって、自分が教会員であると告げたとき、そのHさんは、「あなたは、ほかの人とちょっと違うなあと思ってたんです」と語られたのです。この人とは、信仰の話になり、興味を持ってくださったので、モルモン書を渡すことになったのですが、その人が、わたしからどういう印象を受けられたのか分かりませんが、わたしのしぐさを見るだけで、何かを感じていたのだなあと分かり、伝道って言葉だけじゃないということを強く印象付けられました。

エピソード２：主がわたしの口を通して語られた

出典：https://allabout.co.jp/gm/gc/466278/

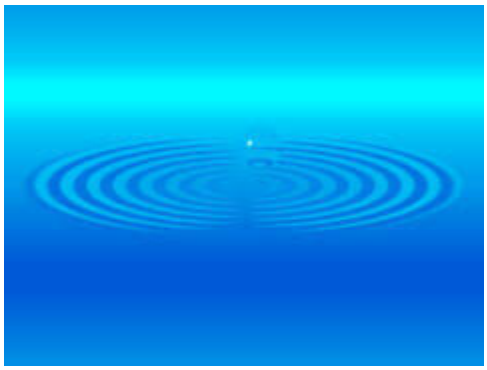
これは、家の玄関の前で起こった出来事で、３０秒もかかったかどうかという短い出来事でした。わたしたち夫婦は５階建てのビルの１階のアパートに住んでいて、近所の人たちと引っ越してから日が浅いとはいえ、ほとんど面識がありません。ある晩、夜も遅く、階上に住んでいる中年ぐらいの男性が郵便受けをチェックして、上に登ろうとしていた階段の手前で、わたしとかち合いました。彼は道を譲ろうしてくれたんですが、わたしは１階ですからどうぞということで、彼が重い荷物を持って階段を上り始めました。その時、この重荷を負っているように見える見知らぬ方に、後ろの方から声をかけていたのです。「お疲れさまでした」という心のこもった優しい言葉が自分の口をついて出ていたのです。一瞬のことで、自分の目を疑いました。自分のことにかまってばかりいる自分には、「こんな状況で、そういう言葉をかける可能性は、９９％以上ない。」そう思いました。家の中に入ってきて、この経験について神様に報告して、涙が溢れました。祈って毎日を主に捧げていると、神様が自分を道具として使ってくださるのだと分かりました。

エピソード３

これは、およそ４０分間ぐらいの間に起こった一連のことで、ただ、伝道モードが極めて高いレベルで起こった経験でした。まず、ラジオ体操の場所に少し早めに行き、そこで、Mさんと間もなくいっしょに行く山歩きのクラブの活動について確認し、これが何らかの伝道の機会の宝庫になるような素晴らしい時になるだろうと予想していました。それからもう一人の参加者で、写真家のKさんに声をかけてみました。彼には、昨年、展示会に招かれて、三鷹まで出かけたことがあるので、もうかなり顔見知りになった方ですが、そのプロの彼に、その公園の色づき始めた２本の色の違う紅葉の見どころを聞いたのですが、即答はありませんでした。それで、体操が始まり、３人の模範演技をしてくれる人が前に立ち、わたしたちは彼らに合わせて体を動かすわけです。そのうちの一人は、エピソード１に出てきたHさんで、わたしもその人に時々注意を向け、その人からも時々注意のまなざしがこちらに向けられます。この日には起こりませんでしたが、機会あるごとに一言二言言葉をかけあうことも体操の前後にあります。やがて、体操も終わりに近づき、わたしの意識は、誰とも話しているのを見たことのない、わたしたち高齢者のグループの中では、だいぶ若い女性のことに注意が向きました。体操しながらも、伏し目がちで、「鬱」かなんかの精神的な病を抱えているのかなと思われました。であれば、誰にでも声をかける、おせっかいな自分が、余計な言葉をかけることは、迷惑千万になりかねない、その人が体操に参加するのをやめる恐れもあるかもしれないという思いもちらっ

と頭によぎりました。しかし、この神様の大切な娘の一人に何か良い影響力になれないかと考えていたのです。それで思いついたのは、わたしたち二人のすぐ近くのもみじが紅葉していることに目を向けて、何か一言言って、差しさわりのない言葉を交わすことができないだろうかとタイミングをうかがったのです。体操が終わり、その人はもう先に立ち去りそうで、チャンスを逸してしまったと思いきや、その人はカバンを取りに水飲み場のところに戻り、まさにその時わたしの足はその横を通り過ぎようとしていたので、「こちらのもみじとあちらのもみじ、色が違って、その対比が美しいですね」と独り言とも取れるようなことをぼそぼそ言っていましたが、なんとその方が反応して、「そうですね。とてもきれいですね」みたいな返事と、その他にも何か言ってくれたのです。あっ、すごい、ここにも神様が祈りに応えてくださったと喜びました。その前後に、Kさんが近づいてきて、「朝日が出てきて、もみじを照らし始めた瞬間が最高でしたね」と教えてくれ、わたしはそれを見逃していましたが、プロの着眼点と、タイミングをつかむことの上手なことがわかり、勉強になりました。実に、人々と交わることは自分を豊かにしてくれると感じます。すべての人には、何か良いものがあって、教えていただくことが次から次へと出てきます。

ところで、これも微妙なことなのですが、ほかの人とは話をすることのない人にわたしが話しかけたという事実は、どのようにほかの人たちにも影響するかはわかりませんが起こっていると思うのです。二人の高齢者の婦人がわたしたちのすぐ後ろにいて、話し合いながら同じ方向に歩き始めていました。彼らがわたしたちの会話を聞いて、どう感じたでしょうか。わたしの様なものがそういう努力をするのを感じ取って、彼らもさりげなく、次の機会にその女性に声をかけてくれるということが起こる可能性はないでしょうか。人と人のつながりはとても微妙で、いろいろなことが小さなことから発展するかもしれません。



出典：https://proverb-encyclopedia.com/dictionary/hamongahirogaru/

わたしは南フィラデルフィアでの清掃活動[2)] の経験から、小さなことから始まっても、波紋によって大きなことに発展できることを、しかし、その成功のカギが、純粋で心から喜んで何かをするときに、それをする人の存在自体（言葉ではなく）が、一瞬にして人々の心を動かし、すごく波及効果があるということがわかりました。義務感で、機械的にやったのでは、人を動かす力にはならないかもしれません。このエピソードに戻ると、やがて、先を歩いているOさんに追いついて、この前いっしょに廃校になった小学校の校庭にある甘柿をいっしょにとって分け合ったことや彼の教えている成人教育のクラスなどについて話しながら次の信号で別れます。その信号は、自分の家に帰る途中にはないので、遠回りです。しかし、貴重なOさんとの会話が起こりました。やがて、自分の家の前に来た時、通り過ぎた時気づいた女性が何やら郵便受けに配布物を入れていたので、ふと立ち止まり、数十メートル戻って、声をかけてみまし

た。すると、自治会の責任を持った人で、４００軒ぐらいを担当していて、そのように朝早く定期的に自治会ニュースを配布しているというのです。その犠牲の精神に感謝の気持ちを伝えると、笑顔が返ってきました。以上で、４０分のドラマが終了します。いろいろなことが起こるものですね。面倒なことですか。いえいえ、けっこう楽しいことで、しかも、神様の手が導いてくださり、幸せな気持ちになります。そして、たくさん運動ができましたし、人々と交わり、いろいろな話題について考えることは、認知症のすごい対策になるのです！！いいことづくめではないでしょうか。

注

１）福音を分かち合う1.1
https://scholarsarchive.byu.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1024&context=sproficiency

2）Bring Your Broomというプロジェクトはたった一人でやり始めたことが、奇跡のように何百人もの人々を動員する大きな活動に発展しました。
https://scholarsarchive.byu.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1003&context=sproficiency